

## 盲流の陸

深夜の冷気は微かに音もなく流れていた。しかしそれは凍えるというほどの寒さを呼ぶことはなく、むしろ人々それぞれの休息をひっそりと押し包み、人々それぞれがそれぞれの休息の内にゆつくりと憩えるようにと、人々の間で交わされる営みを音もなく断ち切るかのようなのだ。人々の間で交わされる営み。眠りは営みを断ち切り、そして夜はひっそりと一人、一人の眠りを押し包む。一人、一人。しかしそれは夜が人を孤独という内省へといざなうということではない。むしろ眠りにおいて人は内省を、つまり自分自身をしりぞくのだ。そのときそこに、つまり断ち切られた営みという間の断面、しりぞいた内省の亡骸として露呈するのは、例えば動物性としてのヒトであり、また体温を持つ物体としてのヒトであり、いまこの瞬間に、不随意運動としての呼吸や心拍そのものとしてさらけ出される身体的な生理としてのヒトであり、いわば人間的な歴史からも世界からも退いた有象無象なのだ。アナキズムという言葉さえもここではすでに内省的に過ぎる。

僕は陸のような西安（シーアン）駅前広場にいる。午前三時。すでに活動を止めてしまった駅舎には乏しい明かり。そして薄暗い広場に陸統と横たわる、僕にとっては得体のしれないと言うほかはない人々。その数は二、三百人にもなるだろうか。おそらくは列車を待つ人々、あるいは宿無し、僕と同じように深夜に到着して、そのまま夜を明かそうというのかもしれない人々、あるいは駅に関係した仕事をする人々、あるいは仕事がなくて行き場のない人々、僕にはただ推測するしかない事情を抱えた人々が、陸のような駅前広場に横たわり、あるいは眠っていた。山ほどの荷物をかたわらにして荷物にもたれるようにして眠る家族らしき人々、大きな麻の袋をシート代わりにして眠る人々、あるいは着の身着のまま地べたに横たわり、陸そのものと化したかのように動かない人々。

午前三時。長い列車の旅と睡眠を求める生理のために、体も頭もじんじんとしていた。広い駅前広場の向こうには闇の中に浮かび上がるようにして、解放飯店の小さなネオンが認められた。しかし時間が時間だし、今夜の分の宿代をとられるのもつたいないので、朝まで待つてから安宿の勝利飯店にあたってみることに決める。しかし寝静まった有象無象の一人として広場のたた中に眠るといのは気が引けた。そこで安らかに休息をするというのにはあまりにも異様な光景だったのだ。眠る人々を遠巻きにするように広場を渡り、広場の端っこの方、地下街への入口の柱にもたれて腰を下ろした。すぐ近くには何かの食べ物の小さな屋台が湯気を上げ、二、三人の男が囁くように言葉を交わしあっていた。

目覚めはぼんぼりのようだ、僕は思う。蛍のように小さな丸い目覚めが広場のそこに寂しげな明かりを囲っていた。コンクリートの駅前広場に夜は静かに落ちて、世界から確実な輪郭をかき消し、視界はすぐには手ざわりのない闇に飲まれてしまう。夜の目覚めが寂しいのは、世界というその土台、確実な舞台をはぐれているからだ。目覚めはそのすぐかたわらにいて、親しい人の眠りにさえも届くことはできず、ましてや語りかけることもできはしない。そのとき目覚めは悟るのだ。確実性というものがもしあるのなら、このときそれは眠りの領域の方へ、世界から夜の領域の方へと移動したのだ。目覚めはまるで自らの存在をいぶかるかのようになり、頼りなげな光をあたりに放つ。深夜のぼんぼりのように。そしてなすこともなくただ待っている。やがて世界が目覚め、夜の領域から立ち上がり、確実な基盤としての明るみをもたらすまで。

ふと立派な駅舎の上方を眺めると、闇の中に浮かび上がるようにして『西安』という赤いネオンサインが光っていた。乏しい外灯の明かりだけしかない薄闇に押し包まれた駅前広場に、ネオンサインのくつきりとした『西安』という文字は、まるで灯台のような印象を与える。灯台の光が陸を、陸の世界を象徴するように、闇夜を背最にした『西安』の文字はそこに世界が存在することを象徴するかのようだ。薄闇に押し包まれた広場のそこそこに頼りなげに光を放つ目覚めが頼りにするのは『西安』のネオンサイン。そこに目覚めの土台、根拠としての世界が存在するという印だ。だが『西安』のネオンサインは両義的だ。その赤い光が闇夜にくつきりとした輪郭をきわだたせるほどに、逆に夜の遠さ深さがきわだつたのだ。表象としての世界は決して根拠ではないということ。確実は不確実の海に浮かぶそれ自体一個のぼんぼりに過ぎない。

『西安』のネオンサインは共産主義的だ、とも僕は思う。それは世界を文字として、名詞的に表象する。世界が名詞であるように、広場に眠る有象無象は人民としてくりとられる。人々が世界を退き、世界という表象が眠りのただ中へと分解し、沈んでしまうそのときでさえ、それは一個の目覚めであろうとする。そのようにしてそれは世界の象徴である以上に、夜の領域そのものに君臨しようとするのだ。それは政治の領域の問題であるだけではない。それはむしろ有象無象の身体の問題だ。世界を、固有を一般名詞として抽象する力。それに対して、固有としての身体とその接続として抽象にあらがう力。ぼくはそこにふと中国の開放経済の象徴図を見るような気がする。開放を指向しつつもそれをあくまでも囲い込もうとする共産党と、そして開放経済という大きな流れに流されつつもその身ひとつを資本にしてありとあらゆる方向に、アナーキーに生き抜こうとする有象無象。

僕は地下街入口の自分のシマをあきらめる。とても眠いし疲れてもいたので横になりたいのだけれども、そこは歩道に面していて、ときおり人が通りかかるので、くつろぐことができないのだ。僕は有象無象のただ中へと足を踏み入れる。広場のど真中にバスタオルを敷いて寝床を確保した。眠っている人と人との間に、じやまにならないようにして。荷物を枕代わりにして、大の字になった。少しひんやりとした陸の感触が伝わってきた。有象無象とは他ならぬ僕のことなのだと思う。そしてゆっくりとした息を吐き、夜へ、眠りの領域へと、自らを退く。頭上高くには『西安』のネオンサインが灯台のような赤い光を放っていた。

※

六月一五日(火)午前一〇…三八。蘭州発浦口行きの一八八次快速列車は始動の軽いショックとともに動き始めた。西安着は夜中の午前〇…一六の予定。蘭州の駅で声をかけてきた女性に買ってもらったチケットなので文句は言えないけれども、夜中の到着なので少し心配だった。夜中に宿を求めてうろろろすることはできないし、うまく泊まれる宿を見つけないことができるだろうか。それにそもそも真夜中にチェックインなどできるものなのだろうか。ガイドブックを調べてみると、安宿というわけではないけれども、西安駅前に外国人も泊まれる解放飯店というホテルがあるようなので、到着したらそこに当たってみようかと思う。

蘭州を出発した列車はしばらく赤土色の黄河に沿って走った。黄河の向こうには樹木の一本もない岩山がそびえ、連なる岩山の裾をえぐるようにして流れる黄河は西方の砂漠や高山地帯の荒涼とした自然の面影を見せていたけれども、すぐに鉄道は黄河の流れとは外れた。というのも蘭州付近で黄河はまるで竜のように大きく北へと蛇行しているからだ。

黄河を離れてしばらく走ると、すでにそこには砂漠の面影はない。ただ遠く近くそびえる山々は黄土色や褐色に近い岩肌をさらし、うつそうと樹木の生い茂る日本の山とはかなり趣は違う。岩山には相変わらずわずかばかりの緑(草)が生えているだけだ。しかし砂漠とは違って平地部分はほとんどが耕されて畑になっている。多くはその穂先をつんととがらせた緑の麦だ。

そう、これから僕がたどっていくのは麦の文化地帯なのだ、と僕はふと思った。江南地方や雲南地方が稲の文化地帯であるように、ここからは麦の文化地帯なのだと、僕は視界に現れては遠ざかっていく麦畑を眺めながら、漠然と思っていた。実は、砂漠から蘭州に戻ったとき、再び中国の中心地帯へと戻っていくのだと、僕は自分の旅がほとんど終わったよう

にも感じていたのだけれども、中国は均質な日本人の情緒に答えてくれるほど平板ではないのだ。稲と麦、それはおそらくともうもない歴史的な段差を象徴するものなのだ。無いに等しい僕の知識では稲と麦とを中国における歴史の段差と結びつけて語ることはできないけれども、車窓から眺める麦畑の情景は感傷にひたるのはまだ早いということを告げているように思われたのだ。僕は決して帰っていくわけではないのだ。僕は行くのだ、この麦畑の上に築かれた文化の地帯へと。

列車が東へ東へと進むにつれて、人跡はしだいに濃厚になってくる。平地の適した所はもちろんだけれども、丘や山でも可能な場所は開墾されて畑になっていく。なだらかな山などはほとんど頂上まで開墾され、段々畑と化している。荒涼とした自然になれた視線にとつては畑というのはなにか心を温めるような人肌のぬくみを感じさせるのだけれども、それもあまりに過ぎるとふとおどろましさのような感じもするのだ。そこまでするか、という気になってしまふのだ。もちろんその背後には、ただ単に人間の努力という抽象的な言葉には解消できない圧倒的な人口の圧力とか農村の貧困とかの問題がひしめいているのだから一方では思っただけでも。

午後、しばらくして列車は突然のように停車した。また駅に着いたのかなと思っただけけれども、窓の外には駅らしい様子はない。駅以外にも停車地点というものがあるのかと別に気にもしなかったのだけれども、列車は一向に発車する気配がない。しばらくすると同乗の乗客たちの気配もざわつき、もしかしたら故障か事故でもあったのかもしれない、と思いつた。ただでさえ遅い西安到着がますます遅くなってしまふという思いに、僕は人知れず焦った。真夜中、人っ子ひとりいない西安の街路に立ちつくす自分の姿が亡霊のように脳裏を過ぎる。しかし思いを伝えるための中国語会話の能力は僕にはなかったし、たとえ伝えられたとしても、ひとりの乗客の思いが事態を打開し、列車を再び動かせるとはもちろん思えない。というわけで、あたかも平然とした顔をして僕はビン入りのお茶に口をつけ、煙草をくゆらすのだった。

白い制服に身を包んだ車両乗務員が何度も車両を行ったり来たりした。乗客のある者は乗務員をつかまえ、説明を求めた。その説明が納得できるものだったのかどうか、あいまいな表情を浮かべる乗客の様子からは分からない。しかしともかくにも列車が動かないことは事実で、事実を受入れるしかないということを、僕は言葉はほとんど理解できないながらも他の乗客たちとともに納得していたのだった。

やがて車両アナウンスが流れ始めた。その一声を聞くやいなや、僕はこけてしまった。というのもスピーカーから流れてくる女性乗務員の声は

アナウンスというよりもアジテーションに近かったからだ。

「本日、この一八八号列車に同乗の同志のみなさん。まずは現在、我々が陥っているところの窮地というものに関して、若干の報告を行っておきたい。本日午後三時四〇分、運転士同志〇〇によって、ブレーキ系統における異常が発見された。同志〇〇の報告を受けた我々は協議の結果、これ以上の走行が危険であるとの判断を下し、列車の停止と点検修理を決定した。現在、故障個所の発見と修理に全力を注いでいるので、同乗の同志のみなさんについても協力をお願いしたい。こほん、あー、あー、あー。ガリガリ（スピーカーの雑音）…繰り返します。本日、この一八八号列車に同乗の同志のみなさん…」

というように、ほとんど中国語の聞き取れない僕には聞こえた。女性服務員のアジテーション、いやアナウンスが事実としてこのようなものであったという自信はもちろんない。ただ僕の耳にはこのように聞こえたということだ。そしてこのような予断と偏見の下で、さすがは中国共産党に指導された中国の国労はすごい、と思ったりもしたのだった。

女性服務員のアナウンスは幾度となく、同内容で繰り返された。車両には煙草の煙がぶかりと流れ、よくあることとでもいうように乗客たちは焦りも怒りも表わすことはなく、事態を受け流しているようだった。ときおり乗客の間に失笑のような笑いが流れた。失笑の波間を、あくまでも事態の把握を周知徹底しようとするかのようなアジテーション口調が貫いていく。

ずいぶんと長いあいだ列車は停車していたけれども、やがてゴトリと軽いショックとともに動き始めた。結局二時間半の遅れ。再び女性服務員の事態打開に至った経過報告。「同志××以下三名による職務への忠誠と英雄的刻苦奮闘により…」というように僕には聞こえた。さすがに長時間の停車によるストレスが解消されたからか、車両には安堵と余裕の気が流れ、今度は乗客たちはアナウンスに対して和気あいあいと応じるかのようなだった。困難な窮地を脱した安堵からか、アナウンスは相変わらずアジテーション的ではあったけれども、ときおり冗談も混じり、和気あいあいとした笑いが車両にもはじけた。

やがて日も暮れ落ちた頃、列車はかなり大きな駅に着いた。乗客のかなりがそこで降り、それまでほぼ満員だった硬座車両は定員の半分くらいの客数になった。僕の座席は三人がけに僕ひとり、向かいにはその駅で乗り込んできた親子ふたり。親子の親の方はかなり年期の入った青い人民服姿の一見して農夫という印象の男。僕にはかなりの年のように見えた。娘の方は四、五才くらい。とても豊かであるとは思えない風情の二人だったけれども、娘のしぐさが可愛らしくて僕は話しかけることもできない

ままに、ちらちらと見ていた。

座席に落ち着いてしばらくすると、農夫は麻袋から落花生を取り出して、娘に与えた。さらには黄色い円板状の食べ物。おそらく小麦粉を円板状にして、油で揚げたもの。どこかの街角で僕も食べた記憶があるのだけれども、あまりおいしいものではない。それには娘もそっぽを向き、しかたなく農夫は麻袋の中へと再びしまうのだった。娘はもてあそぶようにして、落花生をいじくり食べていた。

しばらく静かに落花生とあそんでいたのだけれども、何が原因か少しづつ娘はむずかり始めた。顔を歪めたり、手足を振り回したりして、しきりに何かを訴えているようだった。しばらくは何をそんなにむずかっているのかと理解できなかつたのだけれども、やがて僕は思い当たる。それは娘の片言のような言葉を耳にしたからでもあつたのだけれども、それは「チータン（鶏蛋）：」という言葉だった。娘はゆで卵を食べたいのだった。そういえば車内販売のゆで卵が何度か車両を行ったり来たりしていた。おそらくそれを見たのだろう。農夫は娘の訴えを無視しているようだった。あるいは困っていた。やたらと要求通りに買い与えるのは良くないと考えてのことなのか、あるいはお金に余裕がなくて買えないのか、僕には分からなかつた。おそらく後者だとは思われたけれども。

やがてまた列車は駅に停車した。停車した車両の脇を線路伝いに物売りが大声を上げながら行ったり来たりした。飲物や煙草や軽食、そしてチータン。とにもかくにも親が買ってくれないということを理解したのかどうか、娘は先程のようにむずかることはなかつたけれども、必死でがまんしつつも体は勝手に動いてしまうともいう風だった。窓の外を物売りが通るたびに、暗闇の中を覗き込むようにして物売りの姿を追いかけていた。

そして列車は物売りをあとに残して出発する。そのときちよつとした事件が起こつた。廊下をへだてた隣には、若者たちのグループがいて、トランプをしたりして騒いでいたのだけれども、彼らのうちのひとりかなんとチータンを買っていたのだ。若い男たちらしく、彼らは陽気に騒ぎながら無造作にチータンを剥き、ぱくりぱくりとむさぼり始めた。それを見てしまった娘の顔はやにわに歪む。それまで必死でこらえていたものがせきを切つたようにあふれだした。指をくわえながら、ほとんど半泣きで「チータン：」と農夫に訴えるのだった。農夫も困り果てたような顔をしていただけれども、僕も困つた。というのも僕はほとんどらい泣きをしてしまったからだ。それに僕は実のところチータンを食べたかつた。晩飯を食べそびれたので腹が減っていたし、娘の欲求を移されたのかもしれない。若者たちの様子によだれを流していたのは実は僕だったのだ。し

かもしもここで僕がチータンを買い、娘の前で食べ始めたとしたら、僕は娘にとつては鬼か悪魔になってしまうではないか。どうしよう。

自問自答を引き連れたまま、列車は駅に停車した。僕にとつても娘にとつても最上の道は、チータンを買って、その内のいくつかを娘にプレゼントするということだと思つた。だけれどもそれはとてもごうまんなことのようにも思われたし、そんな哀れみは農夫も娘も拒絶するかもしれないと思われた。考えあぐね、決めかねているうちに窓の外をチータン売りが通つていく。ふと思ひ切り、僕はチータン売りを呼び止める。二元で七個。

チータンをテーブルに置き、おもむろにそのひとつを僕は取り出した。じつと僕の手もとを覗き見る娘の視線が感じられたけれども、わざと気づかないふりをして、チータンの殻を剥く。そして、パクリ。そのとき初めて気づいたかのように、

「きみも食べる？」

と、ひとつを娘の目の前に差し出した。

娘は思いがけないことのように、あどすさるようにしてチータンを受け取つた。見も知らぬ、しかも外国人の男がチータンを差し出したのだ。うれいような、しかし一方で困つたような顔をして、尋ねるような視線を農夫の方へと向ける。農夫の表情を僕は読むことができない。深く刻まれた皺の下に、困惑したような気持ちが流れたようにも思われた。きつぱりとした拒否の言葉がないからか、娘は少し困つたような様子でそれでも殻を剥き始めた。それを見て少し僕はほつとする。おおっぴらにチータンをむさぼつたのだつた

列車は夜のただ中を走り続け、へんな成り行きだつたけれども、思いを遂げた娘は農夫の膝で眠つていた。やがて列車は宝鶏市に着いた。かなり大きな駅らしく、多くの乗客が席を立つた。ふと見ると、向かいの親子も降車の様子だつた。立ち上がりまぎわ、農夫は人民服のポケットから皺くちゃの五角札を差し出した。外国人に対してどのように言葉をかけたらいいか、とまどつているかのように。そして僕も農夫に対して、そういうつもりではないということ、どのようにつたえたらいいのか分からないままに、身振りで、

「いらない、いらない」と答えたのだつた。

ちよつとした心理的なストレスがあつたのかもしれない。農夫の親子が降りたあと、僕は眠つてしまつた。しばらく眠り、ふと目覚めては西安到着を氣にした。到着予定の午前〇…一六もはるかに過ぎて、いったい今夜の宿はどうなることやら、と心配したのだつた。結局、途中停車の時間が最後まで効いて、西安到着は午前三時前だつた。

深夜の寝静まった西安駅を、脂のように疲労を漂わせた同乗の旅客たちとともに吐き出されたとき、僕はそこに陸続と横たわる夜の避難民たちを見出したのだ。

すでに路線バスも車も動きを止め、広場の向こうには解放飯店の小さなネオンが見えたけれども、その明かりは活動を表わすというよりもむしろ常夜灯のようにそのふところに眠りを囲うもののように思われた。午前三時、いまさらホテルにチェックインすることを考えるよりも、この場所から西安めぐりを始めよう、と僕は思う。この有象無象、陸続と横たわる夜の避難民たちの一員として。